

女の庭

芝木好子

読売新聞社

しばき よしこ
芝木 好子
おんな にわ
女の庭

昭和四十七年六月十日 第一刷

発行者 二宮 信 親
発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の二 100

大阪市北区野崎町七七 530

北九州市小倉区明和町一の二 802

印刷所 株式会社 細川活版所

製本所 協和製本株式会社

定価 六八〇円

目

次

年々の花	散り花	遠い青春	紫陽花	新しい日々	女の庭
121	97	73	55	35	7

あとがき

241

二人の縁

213

渦の中

185

三姉妹

165

ある別れ

141

装丁 難波淳郎

小説集

女の庭

女
の
庭

伯父のあとから築地の料亭「鳴滝」の門を入りながら、小谷洋二は久しぶりだなと思った。もと築地川の近くにこれだけたっぷりした前庭と優雅な玄関を持つ料亭は珍しい。それでいておおげさな石灯籠などはなく、親しみやすい雰囲気である。伯父の北岡はさっさと自分の家のような気やすさで、灯の入った玄関へ入っていった。顔なじみの女中や下足番がいっせいに挨拶すると、洋二を振り向いて、どうだ、いいだろうというように顎をしゃくった。

「女将^{おかみ}はいるかい」

女中頭の梅がどうぞ、と案内に立った。いつもなら、おかみさんのいないことがありますか、くらいは言うのだが、若い客が一緒なので領いたきりだった。北岡の通る座敷は決まっています、庭の見つきの良い離れである。「鳴滝」の庭は石の中庭で、昔は上の岩場から滝が流れたというが、今は岩場の間に植え込みをして、庭に張り出した左右のどの部屋からも落ち着いた眺めにしてある。渡り廊下から座敷へ通った洋二は、幾年ぶりかで日本の木の香をかぐ心地がした。

「純日本風の味も悪くないだろう」と北岡も言った。

「ここは覚えてますよ、庭も部屋も変わらないから。伯父さんとは法事も祝い事も、客をするのはみんなこの家だから」

「洋二だけ連れてきたことはなかったか」

「大学へ入った時連れてきてもらったな、十年の余も前ですよ。設計をやるなら古いものをよく見ておけ、とかなんとか言われたっけ」

彼は設計で一人立ちするようになってからもこの伯父には世話になったが、「鳴滝」へはかけちがつて招かれたことはなかった。しかし来てみると少しも変わらなくて、座敷も庭も痛みを見せずにきちんとしているのに感心した。まだ夕暮れの時間で、客の出足はこれからというところらしい。北岡のいつも飲む酒が運ばれてくると、あとからこの家の女将の須磨が挨拶に来た。たっぷりした黒髪と色白のきめのこまかい肌の引き立つ、ふくよかな五十歳がらみの女主人である。

「いらっしゃいませ。こちらは亡くなったみさ子さんの息子さんでいらっしゃいませしょう？」

須磨は「鳴滝」の家付き娘らしい、おっとりした口調で言った。

「よく覚えているねえ。洋二だ。『鳴滝』の繁昌するのはあんたが客の顔を一度でおぼえるからだ」と北岡は機嫌よかった。

「おぼえているのは当たり前ですよ、みさ子さんは私より小学校が一年上でしたものの。そのまた二つ上が北岡さんで、がき大将でしたものね」

「しかし色の白い、ふっくらした女の子にはやさしかったな。橋の上で用もないのに女の子の帰るのを待っていたものだ。女の子のセーラー服姿も可愛かった。一度付け文したのを覚えているだろう？」

「知りませんよ、そんな勇氣もなかったくせに」

「家付き娘は存外気が強いんだ。まわりでうろろしている男どもを寄せつけずに、さっさと婿さんを貰っちゃった。婿さんが早く亡くなったのは捨てられた男どもの怨念のせいだ」

「話がうまく出来すぎて、初めてのの方は本気になさるわ」

須磨が洋二に笑いかけると、料理を運んできた梅が、

「この前には北岡さんが失恋して、男泣きに泣いたお話でしたよ」

「ばかだな、泣いたのは警視庁へ出ている鶴川じゃないか。あれは大体が泣き上戸なんだ」

北岡は酒で陽気になる質で、舌のまわりがよくなった。須磨が未亡人になったのは三十代のなかばで、その時から築地界隈の北岡の仲間は滝川須磨の貞操を守る会を結集して、今日に及んだというのだった。若い甥の前で馬鹿話をする北岡を、須磨はなんて人だろうという眼で睨んだ。

「今日はなにか良いことがおありなのでしょう？」

と彼女は話題をそらして、二人の顔を見比べた。商売柄人の顔色をみるのは早い。今日北岡は洋二を連れて友人の会社へゆき、建築のかなりな仕事を取ってやったところだった。大学時代に母親を亡くし、そのあとごたごたと恋愛事件を起こし、やっと落ち着いたと思うと留学生になってイタリアへ行った洋二を、北岡はいつも気にしていた。日本へ帰ってきた今度こそみっちり仕事をさせたいと思い、出来るだけ援助しようと考えていた。

「若い時はいろいろな思いをするのがいいのさ。それがみんな精神の糧になる。恋愛一つ知らない、人間らしい苦しみも知らない人間に血の通った建築は出来ない。つまり頭の先のほうで造られたもの

は空虚なのだ。感覚だけでまとめた新しい建物は飽きるよ」

「僕らは一度それをやってみないと、飽きるかどうかわからないところがあるな」

洋二は伯父と自分の時代の差を考えていた。しかし伯父の下町の人間らしいまっとうさは好きだった。そばで須磨は男同士の話を好もしそうに聞いていた。

「建築をなさっていらっしゃるのですか。娘が自分の部屋を変えたがってしましてね。古い家に閉じこもると、へんな気がするんですよ」

「美香ちゃんはいろのかい、出し惜しみするなよ。ばあさんはどうもケチだ」

「ばあさんですみません。北岡さんよりこれからもう三つ年下なんですから」

立ち上がった須磨は姿になんとも言えない女らしさと色気があって、洋二は伯父が熱心に通っているのも無理はないと思った。庭をはさんだ両側の部屋に客が入りはじめたとみえて灯の下に人影が見える。近くの築地川が埋め立てられて高速道路になってからすっかり風情がなくなったが、「鳴滝」の高い塀で囲まれた一郭だけはしっかりと別世界である。

「良い家ですね。料理もうまいし、下町の郷愁を感じるな」

洋二は酒を久しぶりに味わうのだった。

「おれの口真似をしちゃ困るよ。この家が残っているから、こっちは思いきって砂漠の中に住んでいいのだ」

北岡はここからは銀座寄りの旧居を壊して鉄筋のビルを建てて、その五階に住んでいる。医療機械

を扱う店を昔から営んでいた。洋二は母の実家をよく覚えていたが、昔は土蔵造りの大きな店付きだった。築地もビルディングが並んで、すっかり昔のおもかげは薄れた。梅が新しい酒を運んできて酌をしていると、次の間の襖が開いて、目のさめるような若い女が入ってきた。色白のすらりとした女は座敷の際であでやかにわらって挨拶した。白牡丹が揺れたように見える。須磨に似ていて、もっと賢そうな、娘とも若妻ともつかない美香子である。洋二は彼女がそばへ寄ってくると、かぐわしい匂いにつつまれながら目をそそいだ。おれはこの女と関りを持つにちがいない、そう直感した。

「これが『鳴滝』の娘の美香子だ。きれいだろう。おふくろさんが一人占めに行っているのもわかるな」

北岡が目を細めて眺める前で、美香子は洋二に会釈した。

「お久しぶりでございます」

「どうも。めったに『鳴滝』へ来ないのに、覚えていてもらえたのかな」

「子供の時分みんなで浜離宮へ行ったことがありますわ。北岡さんの文枝さんのところへ遊びに行つて、一緒に氷水を飲みに行ったんですわ。私とあなたが一番小さかった」

「そういえば色の白い、眼の大きい女の子がいたのを覚えている。小学校の四年生くらいだった。あれ、君なの？」

「途中はあんまり覚えていないんですけど、あの時紅い氷水を飲んだのと、初めて見る男の子は印象に残ってますわ」

「すると、初めの日と今日ってことになる。途中は抜けている」

洋二はこの若い女が三十歳を一つ二つすぎているのかとおどろき、娘盛りの美香子を知りたかったと思った。北岡は同年配の二人を見比べて、これはいい、とよろこんだ。

「婚期おくれが二人揃ったというわけか」

「こちら、まだお嫁さんが来ないのですか」

へんな言い方をするひとだ、と洋二は苦笑しながら、貰わないだけだと言った。二年半ほどイタリアのミラノにいた彼は、帰ってきてまだ幾月もたたなかつた。

「あとから目の色の違う女が追いかけてくることはないだろうね」

「わからないですよ」

「いや、異国の女はやめとき。この離れへ招んでも、うつりが悪くて困る」

北岡はそう言った。

「イタリアの町にも古い迷路のような場所がありますの？」

と美香子は訊ねた。

「百年以上前のきたならしい石の建物の貧民窟がありますよ、壊しも直しもできないのが。饅えた臭いの中にイタリア人の体臭がまじっていたっけ」

「築地川沿いの古い家にも溝の臭いが上ってきたものですわ。あたくしそれを自分の町の臭いだと思っていました。明治のころは川獺かわうさがこのあたりにいたのですって」